

平成 21 年 6 月 16 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18730548  
 研究課題名（和文） 日本語学・日本語教育の概念を応用した国語科言語事項の指導法開発  
 研究課題名（英文） A Development of Teaching Method in Japanese Language Education for Japanese Children Applied a Concept of Japanese Linguistics and Japanese Teaching as a Foreign Language

研究代表者  
 森 篤嗣 (MORI ATSUSHI)  
 独立行政法人国立国語研究所・日本語教育基盤情報センター・研究員  
 研究者番号：30407209

研究成果の概要：本研究は、日本語学・日本語教育の概念を応用し、小中高の国語科における指導法の開発を目的として進めた。具体的には、日本語教育におけるロールプレイ（特定の場面において、役割を演じることにより会話を学習する方法）を、小学校及び高等学校で実際に行い、その成果について検証した。また、国語科における聞き取り試験と小中高生の聞き取り能力の関係を検証するために、日本語非母語話者向けの聴解試験を児童・生徒に受験してもらい、その結果についての分析を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,000,000	150,000	2,150,000

研究分野：国語科教育・日本語学・日本語教育

科研費の分科・細目：社会科学，教育学，教科教育学

キーワード：国語科教育，日本語学，日本語教育，ロールプレイ，聞き取り能力，小学生，高校生，授業実践

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の状況も現状も大きく変わらないが、国語科教育と日本語学・日本語教育は密接な関係にあるとは言い難い。例えば、国語科における文法教育への提言は多数存在するが、どうしても日本語学からは内容論、国語科教育学からは方法論に偏りがちである。日本語学は、その精緻化に伴って専門が細分化してくる傾向にあり、文法体系全般に対して見渡し、なおかつ文法教育にも意見を述べるということは難しい現状にある。特に日本語学は1970年代頃からは、外国人に対す

る日本語教育への応用という形で発展してきたため、日本語学と国語科教育との関係は国語学と国語科教育の関係以上に薄いと言える。一方で国語科教育では、文法を含む言語事項の研究は活発に行われているとは言えない。日本語教育では、日本語学ないしは関連分野の成果によって様々な指導法（ロールプレイ・シャドーイングなど）が開発されており、国語科教育でもこれら日本語教育の指導法を参考に新たな指導法の開発が可能であると考えた。

また、言語学・国語学・日本語学など言語

研究の立場から国語科教育への提言が、提言にとどまり具体的な展開に至らないのは、学校教育現場まで提言が届かないということも重大な問題であった。小・中・高の現場教師は、日々の教育実践及び校務に追われている。一方で国語科教育研究では現場教師と共同研究を行い、新しい知見を活かした教育実践研究及び、その授業分析によるフィードバックを行っている。こうした国語科教育研究の手法を取り入れ、現場教師との積極的な協働により、話し言葉も含めた国語科言語事項の指導法の開発・修正を進めていく必要を認識し、本研究に着手した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語学・日本語教育の概念を応用し、小中高の国語科における指導法の開発することである。今回の研究では具体的に「ロールプレイによる会話能力の向上」および「聞き取り試験による能力の測定と分析」という二つのプロジェクトを並行して進め、それぞれの研究の目的が達成されるように進めた。

また、上記の二つのプロジェクト以外にも、国語科教育や学校教育と日本語教育が関連する諸問題について、基礎的な調査・研究を行った。

## 3. 研究の方法

(1) 日本語教育におけるロールプレイ（特定の場面において、役割を演じることにより会話を学習する方法）を、小学校及び高等学校で実際に行い、その成果について検証した。

日本語教育の分野では、日本語教育の現場において、コミュニカティブアプローチを支える教室活動として取り入れられ、会話練習として、また社会生活に即した実践練習として高い効果があることが認められている。本研究では、高等学校国語科の授業において、このロールプレイを導入した話し言葉教育を実施し、実践の意義と課題を捉えることを目的とした（ロールプレイとは、ロールカードにより与えられる「役割、状況」に応じて会話を行う活動である）。

2006年度当初より授業実践実施校である大阪市立桜宮高等学校の豊田誠首席と、メールでの打ち合わせを始め、2006年4月18日に桜宮高校を訪問し、授業実践の打ち合わせ及び校長など管理職への挨拶を行った。授業実践は2006年6月19～20日に2クラスで2時間ずつ行った。さらに、学習効果を確認するためアンケートやフォローアップ・インタビューを実施した。

国語科教育における話し言葉教育ではプレゼンテーションやディベートなど公的場

面の学習活動が多い。それに対して日常会話など私的場面の学習活動はほとんど行われていない。日本語母語話者は日本語能力が高いため、私的場面の学習活動は不要だと考えられているのかもしれない。しかし、現実には日本語母語話者でも自分の「思い」を伝えられず悔しい思いをした経験、本来の意図と違って伝わって誤解された経験もあるはずで、その重要性は高く、私的場面の学習活動導入は大きな課題である。

次に高校生対象での成果を活かし、2008年2月26日・27日に愛媛県西余市立狩江小学校にて、小学生を対象としたロールプレイの再度の授業実践を行った。小規模学校であり、全校児童は40名である。今回は、5年生7名と6年生5名を合わせた13名を対象に実践を行った。学級担任の牛頭哲宏教諭と指導案について相談を重ね、実践は牛頭教諭が行い、筆者は観察に回った。

(2) 国語科における聞き取り試験と小中高生の聞き取り能力の関係を検証するために、日本語非母語話者向けの聴解試験を児童・生徒に受験してもらった。調査対象は愛媛県の公立小学校の5年生、東京都の公立中学校の3年生、大阪市の公立高校の3年生である。調査時期は2007年2月で、それぞれ下記内容の調査を行った（括弧内は実施人数と満点）

- a. 平成17年度日本語能力試験聴解試験1級（小学生42人／中学生95人／高校生127人、29点満点(11)）\*制限時間45分
- b. 平成17年度日本語能力試験聴解試験2級（小学生41人／中学生95人／高校生137人、27点満点）\*制限時間40分
- c. 平成13年度センター試験「国語I」本試験（高校生119人、70点満点）
- d. 平成19年度埼玉県公立高校入学試験「国語（作文8点、読む23点、言語9点）」（中学生99人、40点満点）
- e. 平成17年度弘前学院聖愛高等学校入学試験「国語聞き取り」（中学生99人、3点満点）
- f. 平成18年度弘前学院聖愛高等学校入学試験「国語聞き取り」（中学生99人、4点満点）

上記a, bで、データ収集の対象に平成17年度日本語能力試験を用いたのは、分析報告書が出ている中で最新の試験だったからである。c, dについては代表的な国語科の試験の代表として、e, fについては過去問として音声もHP上で公開している数少ない国語の聞き取り試験なので国語聞き取り試験の代表として、日本語能力試験結果との相関をみるために実施した。

(3) 国語科における言語事項に関しては、時枝誠記以降は国語学・日本語学からの積極的なアプローチはなかったが、そうした状況にあって異質なものは、現在の日本語学に大きな影響を与えている三上章の存在である。日本語学の概念を国語科教育言語事項に応用するための基礎的な分析として、三上章の文法教育観について考察した。生前は高いとは言えなかった三上の日本語研究における業績は、現在では高く評価されていると言える。しかし、三上がもう一つ力を注いでいた文法教育研究については、未だ相応の評価を得ていないと言える。本稿では、三上章の文法教育に関する言質に焦点を当て、三上の文法教育観について論じた。

また、国語科教育と日本語教育の接点として注目される年少者日本語教育に関する基礎的な調査・研究を行った。小学校 JSL (Japanese as a Second Language) カリキュラムは、文部科学省の施策として 2001 年から開発が進められ、2003 年 7 月に最終報告書が公表された。本稿ではこの JSL カリキュラムの国語科編に着目し、年少者日本語教育における「国語」と「日本語」の関係について論じた。

さらに、学校教育における語彙の教育に関して基礎的な調査・研究を行った。まず、語彙の「何を教えるか」と「どのように教えるか」という点について述べ、「国語科以外での語彙」「学校教育と年少者日本語教育の語彙」について扱った。語彙の教育は言語教育にとって非常に重要な柱であるが、国語科言語事項の中心的な課題として十分に扱われてきたとは言い難い。特に外国人児童・生徒の数が増加の一途にある現代の学校教育において、語彙の教育の今までの成果を振り返り、将来の展望をする重要性がある。

#### 4. 研究成果

(1) ロールプレイを導入した授業実践に関する成果については、まず高校生対象の授業実践については、「日本語教育の方法を応用した話し言葉教育の試みーロールプレイを用いた高等学校国語科の授業ー」というタイトルで、第 113 回全国大学国語教育学会 (於：岡山大学) にて口頭発表を行った。高等学校指導要領にもある「自分の考えをもって論理的に述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりすること」を達成するためには、日本語教育で会話教育としてノウハウが蓄積されたロールプレイを導入することの意義は大きいことが確認された。

また、小学生対象の授業実践に関しては、2009 年夏に慶應義塾大学出版会から刊行される予定の『国語と英語の連携 (仮)』に収

録される「英語の前に国語」の声に込められる言語教育とは」の中にその一部の成果を発表した。児童同士の相互評価や教師による評価で挙げられたことは、何気ない言語行動であり、日常生活の中では意識することもない表現かもしれないが、それを意識化して評価することによって、「方略的能力」を高める手だてとして十分に機能していると言えることがわかった。

重要なのは、「ロールプレイをすること」が目的ではなく、ロールプレイという活動をしただけではほとんど意味をなさないということである。「方略的能力」を高める手だてとして機能するには、児童同士の相互評価や教師の評価が不可欠である。こうした何気ない言語行動の意識化と評価を通して初めて「方略的能力」を高める手だてとして機能するのである。そして、こうした言語行動への評価は「方略的能力」として独立して存在するわけではなく、個別の表現という「言語能力」が関わる部分への言及を駆使して行われるため、日本語学の知見も応用可能である。こうした本研究の成果を普及させるために、本研究課題の研究協力者と共に、小学生向けロールプレイの市販教材を企画・執筆中である。

(2) 聞き取り試験による小中高生の能力の検証に関しては、「日本語能力試験による中高生の聞き取り能力調査」というタイトルで、第 114 回全国大学語教育学会 (於：茨城大学) で口頭発表を行った。重回帰分析により、国語科の聞く試験の結果からは、聞き取りではない国語科の一般的な試験の結果は予測できないが、日本語能力試験聴解問題の結果からは国語科の一般的な試験の結果を十分に予測できるという報告をしている。このことから日本語能力試験聴解問題の国語科聞き取り試験への応用は極めて高い可能性を持っていると言えるだろう。

また、小学生のデータも含め、国語教育の聞き取りの改善の観点から論文にまとめ、査読誌に投稿した。また、小問別正答率を中心に母語話者 (小中高生) の観点から日本語能力試験 (聴解試験) の構成概念について論文にまとめ、査読誌に投稿した。一連の研究のまとめとして、研究協力者との討議により、国語教育における聞き取り指導のあり方について改善の方向を検討した。さらに、全国の高等学校入学試験における国語科の聞き取り試験の状況に関しては、各都道府県の教育委員会に依頼して情報・資料を収集し、その成果の一端を「聞き取り試験は何を測っているか」(『文化庁月報』477 に収録) において発表した。

(3) 国語科教育や学校教育と日本語教育が

関連する諸問題についての基礎的な調査・研究については、それぞれ「学校教育における「語彙」の教育」(『日本語学』27(10)に収録)、「小学校 JSL カリキュラムにみる国語科と日本語」(『実践国文学』70に収録)、「三上章における文法教育観」(『国語と国文学』83(8)に収録)で独立した雑誌論文として発表した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①森篤嗣 2008「学校教育における「語彙」の教育」『日本語学』27(10), 明治書院, 4-15  
【査読なし】
- ②森篤嗣 2008「聞き取り試験は何を測っているか」『文化庁月報』477, ぎょうせい, 27  
【査読なし】
- ③森篤嗣 2006「小学校 JSL カリキュラムにみる国語科と日本語」『実践国文学』70, 実践国文学会, 105-120 【査読なし】
- ④森篤嗣 2006「三上章における文法教育観」『国語と国文学』83(8), 東京大学国語国文学会, 57-69 【査読あり】

[学会発表] (計2件)

- ①森篤嗣・豊田誠 2008「日本語能力試験による中高生の聞き取り能力調査」『国語科教育研究』第114回全国大学国語教育学会発表要旨集, 155-158  
[http://nels.nii.ac.jp/els/110007009764.pdf?id=ART0008928863&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1245054648&cp=](http://nels.nii.ac.jp/els/110007009764.pdf?id=ART0008928863&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1245054648&cp=)
- ②森篤嗣・豊田誠 2007「日本語教育の方法を応用した話し言葉教育の試み ―ロールプレイを用いた高等学校国語科の授業―」『国語科教育研究』第113回全国大学国語教育学会発表要旨集, 9-12  
[http://nels.nii.ac.jp/els/110007009663.pdf?id=ART0008928749&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1245054673&cp=](http://nels.nii.ac.jp/els/110007009663.pdf?id=ART0008928749&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1245054673&cp=)

[図書] (計1件)

- ①森篤嗣 2009 予定「英語の前に国語」の声に  
応えられる言語教育とは」『国語と英語の連携 (仮)』慶應義塾大学出版会

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 篤嗣 (MORI ATSUSHI)

独立行政法人国立国語研究所・日本語教育  
基盤情報センター・研究員

研究者番号：30407209

### (2) 研究協力者

豊田 誠 (TOYOTA MAKOTO)

大阪市立住之江特別支援学校・教頭

研究者番号：なし

牛頭 哲宏 (GOZU TETSUHIRO)

愛媛県西余市立狩江小学校・教諭

研究者番号：なし